

分水嶺夫婦

小道 周帆

思いもかけず、高橋幸次はひとり旅に出た。

家内の、いや殆ど家に居ないことからいえば家外というべき昭子は今日もスポーツクラブに行っており、その後は仲間との食事とダベリングだろう。スポーツクラブには夫婦割引があるが、幸次とは別のスポーツクラブである。お互い干渉されずに汗を流そうという、昭子の提案に従った。

幸次は企業戦士として働き続け、気が付けば定年。その後は関連会社での手伝い仕事で週に二、三度出勤していた。その頃は、周りには仕事仲間がおり、頼りにもされ、それなりの役割を果たせていた。ところが今は仕事もなければ仲間もない。本を読むか、テレビを見るか、図書館に行くか、スポーツクラブに顔を出すかしかない。

「思い切って、一人旅に出る。三泊四日、八月三十一日に戻る。」

その間、食事の用意は要らぬ

幸次

とメモを書き、読み直してみても「思い切って、」の部分消した。

幸次が急に旅に出ようと決めたのは昨夜のちよつとした昭子とのやりとりからだ。

「今年の秋はどこにする？」

「旅行のこと？いいけど今までのようだと行きたくないわ」

「どうということ……」

「だって私ばかり気を遣って、あなたは自分勝手じゃないの」

「そうかな、それなりに気を遣っているつもりだけど……」

「いいえ、まだ会社気分、旅行というより出張気分じゃないの。私は部下じゃないんだから」

「……………」

「例えば、決めた場所に行くことだけを優先させるじゃないの。おみやげ屋さんを覗いたり、地元のお菓子を味見したりするのが楽しいのに……」

「結構付き合っているつもりだよ」

「でもね、目は『早くしろよ』って感じよ。未だに目的だけを中心に考える会社生活の延長になっているのよ。今回は夫婦別々の旅行というのはどう？お互

「見えるものや関心事が違うのだから……」
「解った」

もう一度メモを、読み返して、「その間は食事の用意は要らぬ」を消した。
この言い方こそが上から目線だと批判されるだろう。わざわざ食事の用意を書いたのは、毎朝、「今日の食事は要るの？」と訊かれる習慣からだ。旅に出るのだから、わざわざ書くこともない。

改めて

” 旅に出る。帰りは八月三十一日の予定 ”
とだけにした。

新宿駅の『緑の窓口』に寄ると「だれでも行ける青春十八切符！」のポスターが目についた。行き先も決めていないだけに、これがいい。すぐさま、とはいえ少し恥ずかしい思いをしながら一一、八五〇円で購入した。幸次の前にいた青年はいかにも青春真っ盛りという感じで「青春十八切符」と声高に言いながら購入していた。せめて高齢者向けには「シルバー切符」と名付けてくれればいいのに……と思いつつながら、小さな声で「十八切符を」と言う。

さて、どこへ行くのか。結局は通いなれた中央線に乗ってしまった。高尾で塩尻行きの列車に接続するとの車内アナウンスで、取り敢えず塩尻で降りようと決めた。

列車に乗ると、サラリーマン時代の癖で、つつい新聞を読んじまう。家庭欄に見慣れない『夫源病』という記事が眼についた。最近、主婦の間では流行している病気とある。どういう病気なのか少し関心を持って読んでみると「夫の言葉や言動に対する不平や不満がストレスになる主婦特有の病気」だと書かれている。なるほど、夫の存在が病気の源ということで、『夫源病』という名前を付けたのか。

何となく釈然としないものを感じる。『夫源病』があるなら、『婦源病』や『妻源病』があってもおかしくないのに、女性中心の家庭欄はこんな書き方をするのかと少々腹立たしい気持ちがあった。

なに？ 『夫源病のチェックリスト』

何もすることもない列車の中での暇潰しにやってみるか。

◆人前で愛想がいいが家では不機嫌

―人前で愛想がいいのは当たり前だろう。だからといって家で不機嫌ということはないから、これは非該当だ。

◆妻の予定や行動をいちいちチェックする

—子どもの頃、母は出掛ける時には何処へ行き、何時に帰るか必ず皆に伝えて出掛けたが、今どきの主婦に訊くとチェックされているように捉えるんだな。いやはや。我が家では訊いても答えないと判っているからチェックもしない。これも非該当。

◆常に「上から目線」で話をする

—これは常に指摘されている。該当。注意はしているのだが、つつい管理職の経験が言わせてしまうのだ。これは素直に反省だな。

◆仕事関係以外の交友や趣味がない

—現役時代は確かにそうだった。定年後は努力しているものまだ不十分だ。何しろ身近に知り合いがいないな。該当。

◆家事に手を出さないが口は出す

—口なんか出せるものか。今じゃ食器洗いは俺の仕事とされてしまった。非該当。

◆妻が一人で外出するのを嫌がる

—これは全く無い。大いに出掛ければいいと、昔から考えていた。非該当。

◆妻や子どもを養ってきたという自負が強い

—当然、その自負はある。今だって、俺が働いてきたから退職金が得られ、厚生年金が受け取れるのだとの思いはある。該当。

◆家事の手伝いや子育てを自慢する自称「いい夫」

—その通り。食器洗いを命ぜられて、文句も言わずに従っている「いい夫」だと思っている。従って、該当かな。

◆「ありがとう」「ごめんなさい」のセリフは殆どない

—これは辛い。その思いはあるが、その前に「イヤ」が付いて言い訳がましい話し方をしていると思う。気を付けたいと思いつつ、家内に言われると素直になれない自分が出てしまう。該当。

◆車の運転をすると性格が一変する

—これは無い。非該当だ。

—こうしてみると、十項目中、該当項目は五つになった。診断結果を読むと、四つ以下は大丈夫のようだが、五つ七つは『夫源病』予備軍とある。そんなに定年後の俺は家内のストレス源なのか。

—ウィークデイでもあり、車内はガラガラの列車だったが、大月駅でリュックを背負った高齢の女性の団体が乗り込んできた。仲間同士で四人席に着いていたが、席に溢れた二人が兎二の前の席に座った。一人でポーと塩尻まで行こう

と思っていたのにとの感じが顔に出たのか、幸次の席に着いた元気な、六十歳は過ぎていると思われる婦人は申し訳なさそうに

「信玄餅はどうですか？」

と声を掛けてきた。それをキツカケに

「あら？お一人ですか？」

「私たちは大菩薩峠に行くんですよ」

ペチャクチャお喋りの中に溶け込むつもりはなかったが、いろいろと訊ねられて話の輪に入ってしまった。

何でも彼女たちは大月の『山登りカルチャー教室』のメンバーだそうで、毎月一回はこうして山に出かけていると言う。

「山登りは月一回だけど、鍛えるのは毎日なんですよ。朝夕に五キロは歩いていますよ」

誇らしげに話してくれた老婦人は七十二歳だという。どう見ても六十歳台だと思っただけに七十二歳とは信じられない。山登りで鍛えているだけに背も真っ直ぐだ。大した人だ。

「そんなに歩いているんじゃない、ご主人はどうしているのですか？」

「あんなの放りばなしよ。囲碁か何かやっているんじゃないの、アツハハ」

「夕飯は？」

「適当に買ってくるんじゃないの、コンビニは便利なものよ」

都会だけじゃなく地方でも女房族が強くなり、旦那は時間を持て余し、コミユニティ施設での囲碁か図書館で昼寝、帰りにはコンビニでの買い物か。同輩相憐れむと同情しながらも、数年後の自分のことのように、趣味がないだけに大いに不安に駆られた。

一行は甲斐大和駅で降りた。席を離れる際に幸次に向かって、

「一人旅の最初の出会いが老婆さんですいませんでしたネ。この後は浮気でもしてよ」

老婦人は笑いながら降りていった。

浮気？幸次が全く考えもしなかったことをあっけらかんと言っただけの彼女に人生の強さを感じさせられた。

鈍行列車は三時間三十分を掛けて終着の塩尻駅に着いた。取り敢えず今夜の宿を決めておこうと駅前の観光案内所に寄ったところ、塩尻市の外れにある木曾路・奈良井宿を勧められる。奈良井までは二十分ほどで行けるようなので、塩尻駅周辺で時間潰しに何か観てみるかという気楽な気持ちになった。この自

由な身勝手さが一人旅の良さであることを実感する。

さて、どこに行くか。いくつかのパンフレットを貰い、名物の蕎麦を食いなから何気なく目に止まったのが『平出遺跡』だった。店からも歩いて行ける所にあり早速出掛けてみた。平日だということもあり、だれもない。

入口には『国史跡 平出遺跡』という案内板が掲げられており、「現在、塩尻市では史跡一帯を、『縄文の村』・『古代農村』の復元や体験地区、ガイダンス地区を設け、史跡公園として整備するための事業に着手しています」とある。

遺跡公園を歩いていたら、前方に千三百年ほど前の古墳時代の竪穴式住居が復元されており、円錐形の大きなもので、部屋の仕切りは全くない。古代人は皆が顔を会わせながら家族団らんの生活をしていたのだろうと、つい思ってしまう自分に苦笑した。

昭子と別の部屋で寝るようになったのは、確か、名古屋での单身赴任から戻ってからだった。子どもの進学の都合で不便な单身生活を強いられ、それを健気に頑張ってきたのに……。戻ってきた際には表面上では歓迎してくれているようだったが、何となく幸次との間にはバリアが築かれているようで、家族の会話にも入れなかった。母親の言うことには素直であったが、父親の言うことには賛成する訳でも、反対する訳でもなく、無視している感じだった。その頃の流行語は「シカト」だった。花札の十点札の鹿の絵模様が浮かんた。

古代人には单身赴任は無いな。夫は毎日狩りに出かけ、獲物を持って帰り、それを家族が感謝しながら暖かく出迎えたのだろう。

我が单身赴任中の獲物というべき給料は、幸次の姿とは無関係に自宅近くの銀行口座に自動的に振り込まれ、家内が引き出していたのだ。お父さんのお陰で給料が得られたという実感はなかったのだろうか。

遺跡公園で犬の散歩をしている六十代後半と思える老夫婦に出会う。

「こんにちは！」

「こんにちは！どちらから？」

「東京です」

「塩尻の街はどうですか？」

「静かでいい街ですね」

そんな会話をご主人と交わしている間、奥さんかというと、一步退がって相づちを打ちながら聞いている姿に、幸次にはすごく眩しく思えた。

「一人旅ですか」と訊かれなかったのは、先方の気遣いなのだろうか。

この秋には二人でフェリーを利用して釧路へ行くという。

「仲が良くてお幸せですね」

一人旅をしている自分が恥ずかしかった。

塩尻から、一両編成のワンマンカーに乗り、奈良井駅に着いた。駅舎は古い町家風の建物であるが無人駅。しかし並行して走っている国道十九号線の交通量は多い。奈良井宿への観光はバスかマイカー。そんな中でのおんびりゆっくりの鈍行列車の旅にこそ味があるのだが、そんなゆとりのある旅は仕事のない高齢者だけかもしれない。

奈良井宿のキャッチフレーズは『いそがなくてもいいんだよ』。

これこそが幸次の気に入ったところだ。

木曾路には妻籠宿や馬籠宿が観光地として有名だが、江戸時代の奈良井宿は中山道の難所鳥居峠を控え、ここで一服する者が多く、木曾路最大の宿場だったと、パンフレットにある。

駅前に『文部省選定重要伝統的建造物群保存地区』の看板を見つめる。なるほど、昔ながらの宿場町を保存しているので、街並みはタイムスリップしてきたような感じであり、時代劇のセットの中を歩いているようでもあった。

コンビニもあるが、そこには全国统一仕様で安っぽいプラスチックの看板も大きなガラス壁もなく、木の看板と木の外壁が使われている。消防詰所もコンクリートの外壁を木で覆って昔の建物に模してある。それらには木の温かみがあり、ごく自然な生活空間があるように思えた。夕涼みのために、今や忘れられた床几が何気なく置いてあり、床几に腰掛けて向こう三軒両隣が談笑しているかと思えば、あちらでは老人と子供が将棋を指している。

それに比べ、幸次はお隣の前田さんのご主人と話したこともない。お互いにサラリーマンなのに、いやサラリーマンだからこそ、挨拶はしても、その後には話せる共通の話題がないのだ。

今夜の宿は本陣跡の隣にある『御宿伊勢屋』だ。江戸時代の宿場そのままの建物で、暖簾をくぐり格子戸から入る。懐かしい三和土たたくが迎えてくれる。

「お疲れ様です。今日はお客さんが二組なので、二階を自由に使ってください」そう言われて、少し危なっかしい急な木の階段を上がって寢床に行く。部屋は広く、襖も大きい。障子を開けると格子越しに街道を見下ろせる。

昭子なら、温泉がなければ旅館ではないと思っっているし、このように戸締りもない、隣とは襖だけというのはプライバシーが保てないと、絶対に泊まるうとしないだろう。いま幸次は『伊勢屋』の格子に手を掛けながら、一人旅に出て良かったと思う。

夕食は一階の広間で一堂に会する形。といっても、その日は幸次と袋井市か

ら来た北原夫妻だけ。木曾の地酒を飲みながら話が弾む。袋井は東海道五十三次のご真ん中、奈良井は中山道六十九次のご真ん中だと説明してくれる。ど真ん中交流があり、それで来たんだと言う。やっぱり江戸時代の気分が残っているんだと少し羨ましく思った。

北原夫妻の趣味はマラソンで、ご主人は若い頃に陸上部の経験があり、五十歳を過ぎてから改めてマラソンに取り組んだそうだ。今は六十四歳。奥さんがサポート役をしている。夫妻の目標は全都道府県のマラソン大会に出場することで、毎年各地に向いてチャレンジし、既に三十一まで征服できたと、楽しく元気に話してくださる。海外は、ホノルルは当然として、パリ、ロンドンのマラソンに参加し、現地の市民ランナーとも親しくなり、来日される際にはマラソン大会の案内役もしているそうだ。

「共通の目標を持つなんて、いい夫婦ですね」

「こう見えても旅行中には、結構ケンカをしていますよ」と笑いながら話された。

就寝前に幸次は、大月の老女夫婦は△か。塩尻の老夫婦は◎、袋井から来た夫妻は断然◎、そして三鷹の我が夫婦は『夫源病』予備軍であり、×に近い△だろうと、閨の夫婦定めをしつつ眠りに入った。

せっかくの奈良井宿だ、もっともとのんびりしたいと、もう一泊することにした。朝の散歩で、太鼓型の『木曾の大橋』から街を眺める。中山道を行き交う旅路の小休止場所の奈良井宿。そして夫婦生活の小休止を求めて、当てもなく来た一人旅の幸次。

「いそがなくてもいいんだよ」と木々のささやきが聞こえてくるようだ。その声に後押しされて今日は鳥居峠にチャレンジしてみよう。

まずは峠越えの無事を祈願して鎮神社にお参りし、傍の案内板を見てみると、「鳥居峠は標高千百九十七メートル。ここが奈良井川と木曾川の分水嶺で、奈良井川は日本海へ、木曾川は太平洋に向かう」とある。ふと、幸次の心に、それぞれの目指す方向が分れてしまっている感じの、昭子との生活の違いを連想してしまう。『分水嶺夫婦』か。そうならないためにもこの峠は制覇しておく必要がありそうだと意気込みが強まる自分に気付き、ひとり苦笑い。

中山道最大の難所とされた山道も、今は信濃路自然歩道として整備されており、歩きやすい。ハイカーに出会うたびに「こんにちは」の声掛けも楽しくなる。道沿いにある「熊除けの鐘」に驚くものの、道端の石仏や道祖神が守って

くれているようで有り難い。やがて鳥居峠に到着。水場で清冽な水を飲み「分水嶺夫婦を制覇したぞ」と小さく叫んでみた。

御嶽遥拝所から木曾御嶽山を望み、恭しくお参りをしておいた。どんなご利益があるのか楽しみだ。傍の公園で、珍しく一人で歩いている人に出会った。何だか真剣に石碑を眺めている。

「こんにちは。熱心ですね」

「エエ、この句碑を求めて、芭蕉の気持ちで歩いているんですもん」

二基の句碑には、達筆すぎて読みにくいと思っていたら、その方が吟じられた。

『木曾の椽とち 浮世の人の土産かな』

『雲雀よりうへにやすらふ嶺かな』

「素晴らしいです。芭蕉の句をスラスラ吟じられるなんて」

「ええ、こうした芭蕉の句碑を訪ねて歩くのが趣味ですさかいな。東海道は終わりましたんや。今は中山道です」

いろいろ話してみると、大阪で高校の国語の教師をしていたそうで、退職後はこうして芭蕉と共に歩いていると言う。そして句について説明して下さい。

『木曾』の句は、『更科紀行』に載っている句で、一六八八年の木曾路の旅での吟で、意味は、浮き世の外のような木曾の山奥で、椽の実を拾って、浮き世に住む友への土産にしよう。どうです、友を想う良い句でしょう」

「はああ、なるほど。この辺りは栃の木の群生地だと説明版に書いてありましたね」

「もう一つの、『雲雀より』の句は、実は鳥居峠での吟ではないんですよ。この句は『笈おひの小文』の旅で、奈良の桜井から吉野の途中にある躰峠ほそでの吟なんです。峠ということで誰かがここに建てたんでしょうね」

「建てた人は観光地狙いなのですかね」

「そういう訳じゃないでしょう。芭蕉好きの人だと思いますよ」

「この句の意味は私でも解りますね。それにここまで雲雀は飛んでくるのですかね」

「ハツハハ、どうですか。いろんなことが想像できて、句碑巡りも楽しいでしょう。止められんのですわ」

この方は平岡さんといい、今日は奈良井宿、しかも『伊勢屋』に泊まるという。

「じゃ、夕食の時に再会しましょう。芭蕉のことを聞かせて下さい」

分水嶺の峠から平岡さんは奈良井宿へ、幸次は藪原宿へと逆の方向へと出発。

分水嶺で別れた相手は女房ならぬ平岡さんで、しかもその日のうちに再会する訳だ。登る前の分水嶺夫婦の連想はいらぬ心配だったと思う。例え、分水嶺のように趣味や関心事で行く方向は違っても、戻る家は同じだと、心から安心した。

藪原の街は宿場の雰囲気が残っており、江戸時代を偲ばせるようなお店の佇まいや「お六櫛」の大きな看板があった。店番をしている如何にも元気なおバサンが声を掛けてきた。

「お客さん。間違ったことは言わないから、奥さんにこの櫛を土産にしなさいよ。喜ばれるよ」

何でも頭痛に悩んでいた美人で評判の旅籠の娘「お六」は、悩み続けていた持病の頭痛を治したい一心で御嶽山に詣で願を掛けたそうだ。すると、お告げがあり、それに従って、「ミネバリの木」で作った櫛を使い、朝夕に黒髪を梳いてみたところ、不思議なことに病は全快したという。

「ミネバリの木って？」

「教えましょう、お六櫛の材料になるミネバリの木は、成長がとても遅く一米り太るのに三年もかかるのよ。それだけに目の詰まった木質となり、とっても堅いので、印材やソロバン玉、ピアノの鍵盤などにも使われます」

「ふうん、なるほどね」

「だからお六櫛はこのミネバリの木を材料に職人が精緻な手仕事で仕上げてゆくとっても価値のある櫛なんだから。奥さんは喜ぶに決まっていますよ」

幸次にとって、櫛なんて百円ショップでしか買ったことがなかった。お六櫛は一万円近くもするのに驚いたが、元気なおバサンにあやかるつもりで買ってみた。果たして昭子は喜ぶだろうか。

奈良井宿から藪原宿まで下り道とはいえ三時間ほどかけて、ゆっくり歩いたが、戻りのJR藪原駅から奈良井駅までは、何と僅か五分で着いてしまう。江戸時代の中山道最大の難所も形無しだ。どちらが良いのだろうかという気もチヨットしてしまう。

芭蕉小父さんの平岡さんは、既に宿の風呂も済んで待ち構えていた。早めの夕食にしてもらい、まずはビールで乾杯だ。

「平岡さんは何日かけて中山道を踏破されるのですか」

「ひと旅は二泊三日にしています。その都度、家に戻り、なんせ七十五歳ですさかいね。一旦、身体を休めてから続きを歩きます。まあ、それを十回ほど繰り返すようになりそうです」

「ええ？七十五歳ですか、とてもそうは見えませんか」

「そういうあんたはいくつですか。六十歳くらいですかな」

「来年、六十七になります」

「そうですか、まだまだ人生を楽しまなあ、あきまへんで」

「この中山道には芭蕉の句碑はいくつあるのですか」

「草津から鴻巣までに三十句あるとされてますわ。こういう芭蕉追っかけ好きは私だけじゃないんです。ほれ、こんな本が売られてるくらいで、やってはる人は多いんですわ。みんな年寄りばかりですけどね」

見せられた本は『芭蕉を歩く 東海道・中山道』。なるほど、芭蕉が歩いた道程の今と昔の写真が出ており、更には資料が掲載されている。

「それはそうと、平岡さんの奥さんはご一緒しないのですか」

「アホなこと言いますな。女がこんな道を歩くと思えますか。いつも出掛ける時には『あんた物好きやね。でも頑張りや』と送り出すだけですわ。女どもはバス旅行でガアガアゆうて、歌、唄うたり、甘いもん食うとったら、それで満足するんや。そんなもんやで。いっしょに旅しようなんて考えたこともないわ。東京の人は違うんかいな」

「いえ、いえ、我が家も同じです。私も一人旅を楽しんでいます」

「そんでいい、そんでいいのや。夫婦は今まで一緒やったんさかい、老後はそれぞれが好きな事をするのが一番や」

平岡さんの割り切った考えに感心した。幸次は家内への腹いせのような形でいきなり旅に出ってしまったが、平岡さんはシッカリと目的を持って、予めいろいろなことを調べた上で旅している。そして奥さんのことは自由にさせとけばいいと当然のように考えているのだ。平岡夫婦はああ見えても○なんだなと思う。

のんびり過ごした翌朝、塩尻方面に歩いて向かう平岡さんと奈良井駅前で別れ、幸次は再び中央本線の鈍行電車に乗る。木曾川と国道十九号線とに挟まれながら、電車は無人駅の続く山間をヨタヨタ走っていく。本数の少ないこの電車に合わせて途中の駅から乗り込んでくるのはお年寄りばかりだ。しかもお互いは顔馴染みのようでおしゃべりも聞こえてくる。旅の最初は一人でボーっと旅行しようとしていた幸次が、袖すり合うも多生の縁とばかり、思いがけず隣に座った方に声を掛けた。

「どちらまで行かれるのですか？」

「坂下までですよ、週に三回病院に通ってるの」

「健康そうですが、どこかお悪いのですか」

「いえね、爺ちゃんがね、入院しているものでね」

「ご主人ですか。それは大変ですね」

「まあ、若いころは悪さばかりしていたから罰が当たったようなもんよ」

「……………」

この木曾地方は檜の産地で、このお婆さんも山持ちの旦那のところ嫁いで、随分苦労したと話してくれた。山持ちというのは、檜を伐採して売ったときには莫大な金が入ったそうで、その金で若い頃の爺さんは遊び呆けて、家のことなんかは一切構わなかったらしい。

「あれだけ酒を飲み、博打にも手を出し、女にいい顔をしていたんだから、肝臓くらいは悪くなって当たり前よ」

「でもこうしてお世話をされるのだから、さすが、いい奥さんですね」

「まあね、歳をとってからは、真面目になったからね。結局はこの婆が頼りなんだよ。男はしょうがないよね。身の回りのことは何にも出来ないんだもんね」
やがて大半の乗客が坂下駅で降りた。見れば駅のそばに『国保坂下病院』という大きな建物があつた。

「では、お大事に…ご苦労様」

「あんたも次は奥さんを連れて旅行しないとダメよ。気をつけてね」

また、言われてしまった。寂しそうな顔をしているのだろうか。

この一両だけの電車は中津川駅止まり。乗り換えた電車は六両連結で名古屋に向かう。電車の中釣り広告に陶芸展のポスターを見て、歳 of 所為か焼き物に魅かれる。よっし！この後は焼き物の瀬戸に行こう。

瀬戸市は瀬戸物の街ではあるが、名古屋の衛星都市として近年はマンションが増えているんだなと思いつながら、駅前から瀬戸川通りに沿って陶器店を廻る。お店の人に、不要になった窯道具を使った塀や壁のある「窯垣の小径」という散歩道を教えて貰った。その小径を歩いていると『窯垣の小径資料館』があつた。お世話役の老婦人が説明してくれている時に、資料館の隣に住む方が顔をだし、加藤とおっしゃって、縁側に座り込んで、ご自身のことを語られる。

「私は窯元の息子だったんですが、先行きに不安もあり後継を嫌って名古屋に生まれました。サラリーマン生活を三十年以上も続け、五年前に定年になり、やっぱり懐かしい瀬戸に夫婦で戻ってきたんです。その時に窯元だった血が湧いたんですかね。この小径に住みたくなりました」

「奥様も瀬戸の人ですか」

「ええ、高校の同級生でした。今は趣味で自分たちの使う物は創っています」

続いて訪ねたのが『マルチメディア伝承工芸館・瀬戸染付研究所』という何だかよく判らない名前。どうやらマルチメディアを活用して瀬戸の焼き物や染付を紹介するとの意味で名付けられたようだ。ここでは親切な事務員さんのお陰で、幸次はパソコンを操作して黄瀬戸の制作行程を観ることが出来た。染付研究所には交流館があり、研修生と直接話しをしながら作陶の様子を覗くこともできる。梅の染付けをしていた若い女性の作品に見入っていたが、彼女は入所して日が浅いので、

「まだまだです」

と謙遜していた。

帰る際に、事務員さんに挨拶すると、この後はぜひ『瀬戸市新世紀工芸館』を訪ねるよう勧められた。

言われるままに『瀬戸市新世紀工芸館』に行ってみた。そこでは有名な陶芸家の三人展が開催されていた。経歴を読むと、いずれも七十歳近い方だった。

老陶芸家の夫婦ってどんな感じの生活なんだろうか。サラリーマンと違って、芸術家であるだけに孤高の人として君臨し、奥様も尊敬の念をお持ちであるに違いない。いや、待てよ。今でこそ芸術家として名を成してはいるものの、若い頃は食えずに奥様の稼ぎを頼りにしていたのかもしれない。そうだとすれば君臨どころか、奥様に頭が上がらないのではと想像すると、微笑ましい気持ちになった。

今日は予約なしでビジネスホテルに泊まり、今日出会った夫妻を思い出してみた。坂下駅で別れたお婆さん夫婦は若い頃は×だが今は○か。瀬戸に戻ってこられたことを嬉しそうに語っていた加藤さん同級生夫妻の関係は○だろうか。そして芸術家夫婦の生活を想像しながら、やっぱり○の夫婦だなと思いがら眠りに就いた。

翌日、瀬戸を後にして、名古屋から新幹線ではなく、『青春十八切符』なので浜松行きの普通電車に乗る。幸次の一人旅も四日目であり、一路東京と考えたが、昼食の時間には少し早い蒲郡で下車した。何か美味しいものはないかと、駅にいた人に聞いてみた。最近オープンした地魚料理の店があると紹介され、訪ねてみた。いかにもオープンしましたという新鮮な感じの『魚清東店』という暖簾をくぐる。カウンターに座ると、調理場がよく見え、若い板さんが手際よく魚を捌いており、その傍に店主なんだろうか、その捌きを見守っている人がいた。

メニューから新鮮一番とあるお奨めの「刺身定食」を注文した。お茶出しの

女性に、「駅にいた人から紹介されたんだよ」と言うと、

「頑張ります！」と明るく答えた。

調理場に居た店主らしい人がわざわざ挨拶に来られた。

「息子が店を出しましたんで、よろしくお願いします。私は街中で本店の方におりますが、ちよつと心配で昼前の準備状況を覗いてみたんです」

「息子さんが独立されたんですね。おめでとございます」

「ありがとうございます。本店で修業させ、そのまま継がせようと考えていたのですが、一人でやって、苦労することも修業だと思い、やらせてみました」
時間的に他にお客がいなかったこともあり、また幸次と年齢が近いことから、ご主人と話が弾んだ。

「ええ、この道、五十年です。夫婦で旅行することはなかったですね。若い時は女房も店の手伝い要員ですから、休むなんてことは出来ません。でもね、店にいろいろな人が来られ、いろんなお話を聞かせて頂いていると、何となく人生の旅をしているような気持ちになれましたね」

「それはいいですね」

「私は勤め人の方と違い、定年はありません。今も、これからも現役です。お客様のお蔭でいつまでも働かせて頂けるのですから、贅沢は言えませんよ。もちろん、大満足です。うちの奴も同じ気持ちだと思いますよ。お互い元気でいつまでも働きますよ」

ご主人の話は説得力があり、いつまでも働き続けられるのが羨ましかった。頑張ってきたこのご夫婦は◎だな。

浜松、熱海で乗り換え、ここで途中下車という手もあったが、三十一日に帰るとメモを置いてきたのだから、心配をさせるのも拙かろうと、素直に東京に向った。

三鷹の自宅に着いた。玄関ドアを開けても昭子のいる気配はない。まあ、いつものことだと思いつつながら、テーブルを見るとメモがあった。

「私もお友達と伊豆高原の温泉で楽しんできます。帰りは九月一日です。

昭子”

その横に、藪原宿で買った「お六櫛」をそつと置いた。頭痛だけでなく夫源病にも効くだろうか。

完

(11607字)